

透は軽やかに笑った。
「丈夫、ちゃんとお腹すかせてきたから」
「ちよつと作りすぎたよ。食べられるかな？」
「大変だったでしょ？ ありがとうね」
「ダメだ」とドライブでお花畑のようだ。ボアロでも評判だといふ赤、黄、鮮やかな緑がバスケットの中を埋め尽す。
「わあ！ きれい！」
その瞬間、思わず大きな声を上げてしまつた。屋に上がる。
「いいや、もう大体準備できてるよ」
「ごめん、つい夢中になっちゃった。早く来
透は床に落ちた鞄を拾い上げながら言つた。
「ハロの興奮がおさまらないので、私はハロ
「わあ！ きれい！」
「ダメだ」とダイングブルに素晴らしい景色が広
赤、黄、鮮やかな緑がバスケットの中を埋め尽す。
「わあ！ きれい！」
その瞬間、思わず大きな声を上げてしまつた。屋に上がる。
「いいや、もう大体準備できてるよ」
「ごめん、つい夢中になっちゃった。早く来
透は床に落ちた鞄を拾い上げながら言つた。
「ハロの興奮がおさまらないので、私はハロ
透は軽やかに笑った。
「丈夫、ちゃんとお腹すかせてきたから」
「ちよつと作りすぎたよ。食べられるかな？」
「大変だったでしょ？ ありがとうね」
「ダメだ」とドライブでお花畑のようだ。ボアロでも評判だといふ赤、黄、鮮やかな緑がバスケットの中を埋め尽す。

私はなんどかそれを受け止めることに成功した。久しくだね、元気だった?」
「ハロ。久しぶりだね、元気だった?」
ハロは尻尾をぶらぶら振りながら、返事をするようにはひどい声吠えた。
ええずいじらしくて、私は三和土に膝ついてハロを抱きしめる。
ハロは私の顔を冷たい舌でべろべろと舐め回した。
「まだ、こんなにかわいいハロのためなら仕方がない。
立つていてることにしづらくなかった。私は、透がすぐそばに
持ちで胸がいっぱいになる。
の顔や口を舐めるのは愛情表現のひとつだそうだ。飼い主で
るものない私にこんなに甘えてくれるなんて嬉しいすぎて、甘い気
立つてそらしてるの?」



魔法ヒステット 5周年企画SS
Thank you for your request!!

「あとはお茶を淹れるだけだから。もう少し待つて」
私はハロを抱きかかえたまま部屋に入り、ベランダに出た。
青々と茂るシンの葉やプチトマト、そしてセロリのプランタ
ーが並んでいて、雲ひとつない快晴の空に向かって葉を伸ば
している。絶好のピクニック日和だ。
今日のデトは私からのリクエストだ。透と会うとき、い
つもハロが置いてきぼりになるのが気になる、という話をし
たのがきっかけで、ハロも一緒に楽しめるデトをしたい提
案したのだ。透は「友人に世話を頼んでいるから大丈夫」と
言ってくれたけれど、透のことを世界で一番愛しているハロ
から透を奪つてひとり占めしてしまうのは良心が咎めるのだ。
そう言つたら透は、「そんなこと言つて、本当はハロに会いたいだけだろ？」
と、見透かしたように笑つた。

「まあ、半分は図星だ。」
そんな話をしていた矢先に、透がドッグランがあるサービスエリアを見つけてくれ、ドライブがてら2人と1匹でのデイトといふことになつた。サンドイッチのお弁当を作つて欲しいとお願いしたのは私だ。予想以上のできばえで、出発する前からお屋が待ち遠しくてしょうがない。
「お待たせ、用意できたよ！」
「キッテンから透が呼んでる。窓を開めて部屋に戻ると、ハロは私の腕から飛び降りて透の元に走つて行つた。」
「ダイニングテーブルにはサンドイッチのバスケットといろいろな荷物が用意してある。ドッグフードやエチケット袋、手袋。透はそれらを手際よくリュックに詰め込んで、ファスナーを閉めた。
「もう出れるの？」
「大丈夫だよ」

透はハロを玄関に呼ぶと、首輪にリードをつけて最後の支度をした。私は鞄を肩にかけ直して、バスケットを持ち上げようとする。透は手を伸ばしてそれをさえぎつた。

「どころが、透は手を伸ばしてそれをさえぎつた。

「ちよつと待つて」

「何？ これくらい私が持つよ」

「そうじやなくて、先にすることがあるだろ」

「え？ 何？」

と、何のまえふりもなく透は私を抱きしめた。まるで、私がハロをぎゅっと抱きかかえたように。

「……もしかして、ハロにやきもちやいたの？」

「おかしい？」

「おかしいよ、だつて相手は犬だよ」

「でもあいつは雄だ」

何でもスマートにこなす透がまさか大に嫉妬するだなんて

意外過ぎて、私は思わず、透の髪をくしやくしやに撫で回した。透にもこんなにかわいい一面があつただなんて、それを見ればただけでも今日のデートの意味はあつたというのだ。芯が強くてさらさらの金髪は、思い切りかき乱してもあつという間に元に戻るから遠慮はしない。透が我慢できずに笑い出すまでそうしてあげたら、透はやつと腕の力を緩めてくれた。

「他にもまだあるでしょう？」

「何？」

透は赤い舌を見せ、ハロが私の口を舐めたようなキスをした。私は思わず体をのけ反らせたけれど、透は私の頸を捕えて逃がさなかつた。息が切れるまでそうした後、透は満足げににんまりと笑つた。

「ごちそうさま」